

報告

平成23年度

北海道医師会賞・北海道知事賞

受賞者業績紹介

前号9月（第1116）号にてご紹介いたしましたとおり、10月1日（土）午後3時より、札幌グランドホテルにおいて、北海道医師会賞・北海道知事賞贈呈式が挙行されました。

ここに受賞された方々のご業績を紹介いたしますとともに、受賞者各位の一層のご活躍を祈念いたします。

—学術部—

平成23年度 北海道医師会賞・北海道知事賞受賞者

医師会名	受賞者職氏名	研究（業績）題名
札幌市	北海道社会保険病院 顧問 関谷千尋	肝細胞がん死の撲滅をめざして
北海道大学	北海道大学大学院医学研究科 生殖内分泌・腫瘍学 教授 櫻木範明	子宮体癌の病態、診断および治療に関する総合的研究
	北海道大学大学院医学研究科 運動機能再建医学 教授 安田和則	膝関節靭帯および軟骨再建手術の開発と普及に関する基礎的・臨床的研究
札幌医科大学	札幌医科大学医学部 内科学第一講座 教授 篠村恭久	胃悪性腫瘍の発生・進展に関する臨床分子病態学的研究
旭川医科大学	旭川医科大学 保健管理センター 所長・教授 川村祐一郎	医学部学生における生活習慣病リスクファクターの推移、およびこれに対する入学前生活の影響の検討
	旭川医科大学医学部 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座 教授 原保明	扁桃病巣性皮膚・骨関節・腎疾患の臨床と病態解明

北海道医師会賞・北海道知事賞

肝細胞がん死の撲滅をめざして



北海道社会保険病院

顧問 せき や ち ひろ
関 谷 千 尋

関谷千尋先生は、昭和42年3月に北海道大学医学部を卒業後、同医学部第3内科に勤務され、内科学の基礎的研究と臨床の研鑽を積まれました。その後、旭川医科大学第3内科、札幌社会保険総合病院副院長、天使大学大学院教授を経て、平成23年4月

からは北海道社会保険病院の顧問に就任されご活躍されております。

現在に至るまで、一貫して肝細胞がんの研究に携わって来られ、肝細胞がん研究の第一人者として、その治療の開発と普及に努められてきました。

また、多数の著書および論文を発表される中、学会活動においてもその実績が高く評価されております。平成19年度には第10回日本高齢消化器病学会会長、平成21年度には第48回日本消化器がん検診学会会長を務められております。このように、多数の学会において要職を務められ、指導医、認定医として後進の指導にもご尽力されております。

以上、先生は研究者・臨床家としてさらなる発展が期待されております。

子宮体癌の病態、診断および治療に関する総合的研究



北海道大学大学院医学研究科 生殖内分泌・腫瘍学

教授 さくら ぎ のり あき
櫻 木 範 明

櫻木範明教授は長年、子宮体癌の治療成績向上を目指して高度な外科的治療と臨床研究・基礎的研究に従事し、国内外において高い評価を得てきた。櫻木教授は組織型が傍大動脈リンパ節転移とともに予後を規定する因子であることを明らかにし、さらに予後不良な組織型である漿液性腺癌では高頻度にトランスドミナンス活性を持つp53癌抑制遺伝子変異が生じていることを明らかにした。この変異の臨床的意義についてドイツMainz大学産婦人科と共同研究を行い、p53ドミナントネガティブ変異が子宮体

癌の最も重要な予後因子の一つであることを明らかにした。現在、この変異遺伝子を標的とした新しい治療法の基礎的研究を進めている。

一方、手術治療に関して、傍大動脈リンパ節を含む系統的リンパ節郭清の予後改善効果を詳細な解析により報告した。これによりそれまで数十年にわたって議論が戦わされてきた傍大動脈リンパ節郭清の意義と、その適応の個別化の重要性が明らかにされ、その成果は高い評価をうけた（Lancet 2010）。

また、櫻木教授は厚生労働科学研究がん臨床研究事業「子宮体がんに対する標準的化学療法確立に関する研究」に参画し、日本婦人科腫瘍学会において専門医制度委員会委員長として婦人科腫瘍専門医の育成にも情熱を注いでいる。道内においてはEBMに基づく医療水準の向上のために、北海道初の婦人科腫瘍の臨床試験グループである北海道婦人科腫瘍研究会を立ち上げ、北海道からの新たなエビデンスの提唱を目指して活動している。

膝関節靭帯および 軟骨再建手術の 開発と普及に関する 基礎的・臨床的研究



北海道大学大学院医学研究科 運動機能再建医学

教授 やす だ かず のり
安 田 和 則

安田和則教授は、生体工学と分子生物学を融合した新しい研究方法を駆使して、靭帯・軟骨の再生・再建機序を解明し、またそれを臨床に応用して多くの新しい再建手術を開発する等、膝関節外科学領域において国際的な業績を上げてきた。

膝関節靭帯再建術における自家移植腱の再生・再構築過程の分子機序の解明に対しては、米国整形外科学スポーツ医学会からアジアから唯一のExcellence in Research 賞が平成5年に与えられた。

また平成16年には解剖学的二束前十字靭帯再建術

の理論と術式を発表し、世界の靭帯再建術領域に大きなインパクトを与えた。この術式はその後の追試で優秀性が証明され、2編の報告論文は現在の臨床医学領域における上位1%高被引用論文になっている。

関節軟骨再建外科領域においては、変形性膝関節症に対する高位脛骨骨切り術における有効矯正角度をその10年成績から初めて決定し、また世界初の超低摩耗セラミック人工膝関節を開発する等、関節形成術の進歩に貢献してきた。最近では特殊なゲルによって誘導される関節軟骨の自然再生現象を発見し、新しい治療戦略である関節軟骨自然再生治療法の開発に取り組んでいる。

さらに安田教授はこの30年間、膝関節外科学領域における最先端の治療を北海道大学病院において実践することにより、多くの膝関節外科医を育てて本邦および北海道の医療レベルの向上に尽くし、また多くの患者を治療することによって道民の福祉に貢献した。

胃悪性腫瘍の 発生・進展に関する 臨床分子病態学的研究



札幌医科大学医学部内科学第一講座

教授 しの むら やす ひさ
篠 村 恭 久

篠村恭久教授は、消化器疾患、特に消化管腫瘍に関する臨床分子病態学的研究を行い、胃癌および消化管間質腫瘍（GIST）の発生・進展にかかわるジェネティックおよびエピジェネティックな異常を解明するなど、顕著な業績を上げている。

篠村教授は胃の増殖異常に着目して研究を行い、胃の巨大皺襞を呈する皺襞肥大型胃炎の病態を解明し、皺襞肥大型胃炎が胃癌の高リスク群であることを明らかにした。さらに、胃癌および胃癌高リスク胃粘膜においてWntシグナル伝達系にかかわる遺伝

子やマイクロRNAのメチル化異常を明らかにした。これらの研究により、胃粘膜にDNAメチル化異常が蓄積することが胃癌の発生に重要な役割を果たしていること、DNAメチル化が胃発癌予測診断のバイオマーカーとなりうることを示された。

GISTの研究においては、GISTに受容体型チロシンキナーゼKITが発現し、KIT遺伝子の機能獲得性変異が高頻度にみられることを明らかにした。この研究成果に基づいて、KITを標的とした治療薬がGISTの治療に用いられて優れた治療効果を発揮している。さらに、ゲノムワイドなDNA低メチル化の指標となるLINE-1の低メチル化がGISTの予後リスクと関連することを明らかにし、LINE-1メチル化がGISTの悪性度診断に有用なバイオマーカーとなることを示した。

これらの研究は、胃癌およびGISTの発生・進展のメカニズムの解明に大きく貢献し、診断および治療への応用に道を拓いた。

医学部学生における
生活習慣病リスクファクターの
推移、およびこれに対する
入学前生活の影響の検討



旭川医科大学保健管理センター

かわ むら ゆういちろう
所長・教授 川 村 祐一郎

川村祐一郎教授は、昭和56年旭川医科大学医学部を卒業し、爾後、循環器内科医としての研鑽を重ね、平成16年より旭川医科大学保健管理センターに着任、平成21年教授に就任した。着任後直ちに、本来の循環器内科医としての豊富な知識と経験から、大学学生の生活習慣病については動脈硬化性疾患の萌芽に着目した。近年、わが国においても食生活の欧米化に伴い生活習慣病の増加が著しく、児童を含む若年層においてすら、運動機会の減少（パソコンゲー

ムの普及などによる)、食事における脂肪摂取比率の上昇など生活内容の変化が明らかであり、無視しえない問題と思われる。

川村教授は、医学部学生生活6年間において、学生の血圧・体重に漸増が見られることを明らかにし、さらにはこれらの生活習慣病の萌芽はすでに入学以前のライフスタイルに依存していることを調査・報告してきた。また、男子学生は女子学生に比し、ファーストフードの摂取が高い反面、緑黄色野菜の摂取が低く、その結果を反映してか、生活習慣病予防という観点から有益なミネラルである、マグネシウムの血中濃度が男子において有意に低値であることを明らかにした。この血清マグネシウム値は全学生の体重、BMIと負の相関を示した。すなわちマグネシウムの低値と肥満との関連が示唆された。

以上のように、川村教授は学生のライフスタイル、生活習慣病などの分野に造詣が深く、学生の健康管理部門における今後のますますの活躍が期待される。

扁桃病巣性皮膚・
骨関節・腎疾患の
臨床と病態解明



旭川医科大学医学部 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座

はら ぶち やす あき
教授 原 渕 保 明

原渕保明教授は、その治療に扁桃摘出術の極めて高い有効性が報告されている扁桃病巣疾患の発症病態について、卒業間もない昭和57年から一貫して研究してきた。まず、本患者では扁桃常在菌に対する免疫寛容機構が破綻していることを明らかにした。続いて、その過剰な免疫応答の結果、扁桃T細胞は活性化し、皮膚親和性受容体やケモカイン・ケモカイン受容体を介した皮膚や腎へのホーミングが起り、組織障害をもたらすという本疾患の発症機序を

成立させたのである。さらに、IgA腎症におけるIgA過剰産生のメカニズムとして、細菌DNAに対する過剰免疫応答によるBAFFの過剰発現を発見し、自然免疫系の異常も関与していることを証明した。

また原渕教授は、掌蹠膿疱症、胸肋鎖骨過形成症およびIgA腎症の3大疾患のほかに、皮膚・骨関節疾患、腎疾患の中に扁桃が病巣となっている疾患を見だし、加えてこれらの疾患が互いに合併しやすいこと、またその発症病態が同一の概念で説明できることから「扁桃病巣性皮膚・骨関節・腎疾患」という新たな疾患概念を提唱した。本疾患は皮膚、骨関節、腎を扱う分野でも難治性疾患とされているが、臨床的には扁桃摘出術という低侵襲手術によって良好な予後を得られることを証明した。

加えて、原渕教授は昨年、これまで国際学会の開催がなかった旭川市で第7回国際扁桃・粘膜シンポジウムを開催し、これまでの研究成果を会長講演として発表し、北海道や旭川市の国際化にも貢献した。